

明恵撰『摧邪輪』卷中 訓・註 試稿(七)

米澤 実江子

承前(『佛教大学 法然仏教学研究センター紀要』第一・二・三・四・五・六)

キーワード

明恵・『摧邪輪』・訓読文・註記

【報告範囲】

「四一丁裏四行目より五〇丁裏一行目」(『鎌倉旧仏教』三五七頁下～三六一頁下)までを挙げ「試稿」とした。

【凡例】

一、底本は、佛教大学附属図書館蔵「寛永年間版(準貴重書 G極楽寺/377)」とし、始めに書き下し該当箇所を翻刻し、次に書き下しとその註記(通し番号)を挙げた。

一、翻刻にあたっては、底本の字体を残した。書き下しに際して、通

行の字体に改めた。

一、翻刻部、【】の内、丁数とオ(ウ)を示す場合は、底本の丁数とその表(裏)を指し、漢数字と上(下)を示す場合は『鎌倉旧仏教』本刻部の頁とその上(下)を指す。

一、〈〉は原割り注。

一、訓読文において、返点・送り仮名は、原則底本に従ったが、送り仮名は適宜補った。

一、訓読文において、典籍引用部は改行して二文字下げた。また引用末の「云々(云云)」は、「云々」と云々(云云)とした。

一、訓読文において、明恵の設問とその答えは、それぞれ改行した。

一、註記における引用出典の略称は以下の通りである。

『昭法全』(『昭和新修法然上人全集』)

『浄全』(『浄土宗全書』)

『大正蔵』(『大正新脩大蔵経』)

『望仏』(『望月佛教大辞典』増訂版)

『中仏』（中村元著『広説佛教語大辞典』）

『織田仏』（織田得能著『織田佛教大辞典』）

『大漢和』（諸橋轍次著『大漢和辞典』）

『日国』（『日本国語大辞典』第二版）

『漢和大辞典』（藤堂明保編『学研 漢和大辞典』）

〔付記〕

当研究班研究課題の底本として、佛教大学附属図書館蔵本を使用させて頂きました。佛教大学附属図書館のご厚情に感謝申し上げます。

《翻刻》

【四一丁ウ】【三五七頁下】次正料簡觀經疏文成下称名下有菩提心義上者、疏言、上來雖説定散兩門之益、望佛本願意在衆生一向專称、弥陀佛名者、泛言一向通三業。即如疏云。禮禮弥陀、称称弥陀、觀觀彌陀等、此中取称名一故除身業。於語意可有二一向義。如迦才淨土論所説口念義也。

《訓》

次に、正しく『觀經の疏』の文を料簡して、「称名の下に菩提心有る義」を成せば、『疏』に言はく。

上來、定散兩門の益を説くと雖も、仏の本願に望むるに、意は衆生一向に弥陀仏名を専称するに在り。

とは、泛く「一向」を言ふに三業に通ず。即ち『疏』に云ふがごとし。

礼するには弥陀を礼し、称するには弥陀を称し、觀ずるには弥陀を觀ずる。

等。此の中には「称名」を取るが故に身業を除く。語意において「一向の義」有るべし。迦才の『淨土論』所説の「口念の義」のごとくなり。

註

- (1) 『觀經疏』、『大正藏』三七、二七八頁上。
- (2) 『觀經疏』、『大正藏』三七、二七二頁中。
- (3) 迦才『淨土論』、『大正藏』四七、八九頁中。

《翻刻》

何者、謂萬行必對有根位有情【三五八頁上】類不對木石、非所化故。不對死人、諸根斷滅故、不可見聞覺知。不可起【四二丁オ】行修道故也。若對有情有根身者、必以心念爲本故。是故此中一向言、必有語一向意一向義。先就三業一向義、設雖有身語一向行、若無意一向義者、不得往生。設雖身語不一向、若有意一向義者、必可得往生。此中取語意一向義也。

《訓》

何とならば、謂はく。万行を勧むるには、必ず有根の位の有情の類に對す。木石に對せざる、所化に非ざるが故に。死人に對せず、諸根斷滅するが故に、見聞覺知すべからず、起行修道すべからざるが故にな

り。若し、有情・有根身に対せば、必ず心念を以て本とするが故に。是の故に、此の中の「一向」の言は、必ず「語一向・意一向」の義有り。先ず、「三業一向の義」に就きて、

たとひ「身語一向の行有り」と雖も、若し意一向の義無くんば、往生を得ざらん。

たとひ「身語一向ならず」と雖も、若し意一向の義有らば、必ず往生を得べし。此の中には、語意一向の義を取るなり。

《翻刻》

若汝、言下文云一向称名外全無意業義者、我问汝、一向称名元意爲依何義利乎。若汝、答曰。爲往生淨土也。我又難汝曰。一向專稱解釋外全無往生淨土之語。汝何作此說乎。若汝、言雖無レ文、理必可然者、我又作此說。雖無文無意業義、理必有之也。若有此義者、意業一向義即是以菩提心【四二丁ウ】可爲先。是故若約称名置散善門義者、可謂。雖不修別定散諸善、發菩提心一向称名、必得往生。〈爲言〉。汝何引此文簡往生正因菩提心乎。

《訓》

若し、汝、文に「一向称名」と云ふ外に全く「意業の義無し」と言はば、我れ汝に問ふ。「一向称名の元意は、何の義利に依るとかせんや」。

若し、汝、答へて曰はく。「往生淨土の爲なり」。

我れ、又汝を難じて曰はく。「一向専称の解釈の外に、全く往生淨

土の語は無し。汝、何ぞ此の説を作すや」。

若し、汝「文無しと雖も、理必ず然るべし」と言はば、我れ又此の説を作す。「文に意業の義無しと雖も、理必ず之れ有るなり。若し此の義有らば、意業一向の義は即ち是れ、菩提心を以て先とすべし」。

是の故に、若し「称名を散善門に置く義」に約せば、謂ふべし。「別別の定散諸善を修せずと雖も、菩提心を發して一向称名せば、必ず往生を得」〈言はんとす〉。汝、何ぞ此の文を引きて、往生正因の菩提心を簡ばんや。

註

- (4) 「一向専称」、『觀經疏』、『大正藏』三七、二七八頁上。
- (5) 「この文」、『觀經疏』、『大正藏』三七、二七八頁上。
- (6) 「引用」、『選択集』第十二章、『昭法全』三三八頁。

《翻刻》

次約置定善門義者、十三定觀中第九觀、是爲根本。餘觀是伴。定亦此諸定方便根本各各差別。一一修之、日數隔別、心想疲勞。稱名三昧是摠定、又是根本。與第九觀無別體。然就此根本三昧亦有方便根本。謂。口称者是方便也。三昧成就者是根本也。是故、令所說十餘定觀、皆爲往生淨土業因。其中雖不修別別諸定若口称三昧成就者、往生淨土無疑。亦於自餘諸定可得成就【四三丁オ】也。

《訓》

次に「定善門に置く義」に約せば、十三定観の中の第九観は是れ根本とす。余観は是れ伴定。亦た此の諸定、方便と根本と各各に差別せり。一一に之れを修せば、日数隔別し心想疲労せん。

「称名三昧」は是れ「惣定」。又是れ「根本」なり。第九観と別体無し。然も、此の根本三昧に就きても亦た方便・根本有り。謂はく。口称は是れ方便なり。三昧成就は是れ根本なり。

是の故に、今の所説の十余の定観は、皆な往生浄土の業因の為なり。其の中に別別の諸定を修せずと雖も、若し口称三昧成就せば、往生浄土、疑い無からん。亦た自余の諸定において成就を得べきなり。

《翻刻》

又與第九真身觀無別體故、十餘眷屬諸定、皆可得成就。是故云一向專稱等。經文【三五八頁下】云持無量壽佛名亦如此可准知。如善導釋云。必可具足三心。若隨一闕不往生。取意。汝又所許也。然者善導釋、兼心念義明矣。其巨如第一門成。

《訓》

又、第九の真身観と別体無きが故に、十余の眷屬諸定、皆な成就を得べし。是の故に「一向專稱」等と云ふ。『經』文に「持無量壽仏名」と云ふも亦た此のごとく准知すべし。

善導の『釈』に云ふがごとし。

必ず三心を具足すべし。若し、随ひて一も闕けぬれば往生せず

《取意》。

汝、又許す所なり。然らば、善導の『釈』、心念を兼ねる義、明けし。其の旨、第一門に成ずるがごとし。

註

- (7) 『観無量壽經』、『大正藏』十二、三四六頁中。
- (8) 『往生礼讃偈』、『大正藏』四七、四三八頁下。

《翻刻》

汎依釋一十方軌解此文義分齊、就善導解釋中於浄土諸行中、或有唯出體聲爲聲二句。如云同發菩提心（鉢聲也）。往生安樂國（爲聲也）等。此於發菩提心之體聲中攝一向專念之業聲也。或有唯出一向專念之業聲攝發菩提心之體聲往生極樂之爲聲。即如此一向專稱解釋也。如此例非一。是【四三丁ウ】故、捨菩提心體立稱名業。如捨樹求影。何其可得乎。

《訓》

汎く、釈文の方軌に依りて、此の文義の分齊を解るに、善導の解釈の中に就きて、浄土の諸行の中において、或は、唯だ「体声」「為声」の二句を出すこと有り。

同發菩提心（体声なり）。往生安樂國（為声なり）。

等と云ふがごとし。

此は「發菩提心の体声」の中において、「一向專念の業声」を撰す

るなり。或は、唯だ「一向専念の業声」を出して「発菩提心の体声」と「往生極楽の為声」とを撰すること有り。即ち此の一向専称の解釈のごときなり。此のごとくの例、一に非ず。

是の故に、菩提心の体を捨てて称名の業を立つるは、樹を捨てて影を求むるがごとし。何ぞ其れ得べきや。

註

- (9) 『観経疏』、『大正蔵』三七、二四六頁上。
(10) 『観経疏』、『大正蔵』三七、二四六頁上。

《翻刻》

又於浄土諸行中發菩提心是男聲也。称名等諸行是女聲也。如男女和合有三生子。若無菩提心丈夫、以誰爲父成浄土眞子乎。當知。今所レ言一向専稱文、出女聲一行一必攝男聲菩提心也。依此男女二行爲弥陀眞子一必可立往生也。

《訓》

又、浄土の諸行の中において、発菩提心は是れ男声なり。称名等の諸行は是れ女声なり。男女和合して、子を生ずこと有るがごとし。若し、菩提心の丈夫無くんば、誰を以て父としてか、浄土の眞子と成らんや。

当に知るべし。今言ふ所の一向専称の文は、女声の一行を出して、必ず男声の菩提心を撰するなり。此の男女二行に依りて、弥陀の眞子

となりて、必ず往生の行を立すべきなり。

《翻刻》

是故、就此文一判宗趣者、(當部所崇曰宗、宗之所歸曰趣。如常)。有二重。一語意相對。稱佛名爲宗。心念成就爲趣。二因果相對。以心念成就爲宗。以往生浄土爲趣。若不爾者、持無量壽佛名之經文、專称彌陀佛名之疏、釋只爲空動口舌無所歸趣乎。如何。

《訓》

是の故に、此の文に就きて宗趣を判せば(當部の崇る所を「宗」と曰ふ。宗が歸する所を「趣」と曰ふ。常のごとし)二重有り。

一は「語意相對」。仏名を称するを「宗」とす。心念成就を「趣」とす。

二は「因果相對」。心念成就を以て「宗」とす。往生浄土を以て「趣」とす。

若し爾らずんば、「持無量壽仏名」の經文、「専称弥陀仏名」の疏釈、只空しく口舌を動じて、帰趣する所無しとやせんや。如何ぞ。

註

- (11) 『観無量壽經』、『大正蔵』十二、三四六頁中。
(12) 『観経疏』、『大正蔵』三七、二七八頁上。

《翻刻》

若シ【四丁才】言ニ文外有ニ往生浄土之大益ニ者、必有ニ此宗趣也。若シ言ハト具ニ三心ニ者、必先以菩提心可レ爲レ本。善導既云同發菩提心等。道綽懷感等又同レ之。若言ニ文云ニ佛名ニ故不モ取ニ心ニ念ニ者、既違ニ三心具足之文ニ。

《訓》

若し、「文の外に往生浄土の大益有り」と言はば、必ず此の「宗趣」有るなり。

若し、「三心を具すべき」と言はば、必ず先ず菩提心を以て本とすべし。善導、既に「同發菩提心」等と云ふ。道綽、懷感等、又之れに同じ。

若し、文に「仏名と云ふが故に心念を取らず」と言はば、既に「三心具足」の文に違しぬ。

註

- (13) 『觀經疏』、『大正藏』三七、二四六頁上。
- (14) 『安樂集』、『大正藏』四七、十六頁中。
- (15) 『釈浄土群疑論』、『大正藏』四七、七三頁下。
- (16) 『觀無量寿經』、『大正藏』十二、三四四頁下。

《翻刻》

又簡ニ菩提心者、三性心都應レ不レ取レ之乎。若言ニ取ニ非ニ菩提心ニ之善

心ニ者、既同取善心。簡菩提心ニ爲レ【三五九頁上】有ニ何用乎。又都簡善心ニ者、可レ取ニ不善無記心ニ乎。尔者、不善心者惡趣之正因也。無記心者不ニ感果。若言ニ三性心都不レ取レ之者、設雖レ称ニ佛号ニ如ニ風林河等音聲。何云ニ持佛名ニ云ニ專称佛名ニ乎。

《訓》

又、菩提心を簡ばば、「三性の心」都て応に之れを取らざるべし。

若し、「菩提心に非ざる善心を取る」と言はば、既に同じく善心を取る。菩提心を簡びて、何の用有りとかせんや。

又、都て「善心」を簡ばば、不善無記心を取るべし。尔らば、「不善心」は惡趣の正因なり。「無記心」は感果せず。

若し、「三性の心、都て之れを取らず」と言はば、たとひ仏号を称すと雖も、風林河等の音声のごとくならん。何ぞ「持仏名」と云ひ、「專称仏名」と云はんや。

註

- (17) 【参考】『俱舍論』「声唯八種（中略）風林河等所發音量」、『大正藏』二九、二二頁下。

《翻刻》

問。若尔者、何故准 善導釋ニ第十八願中以稱名ニ爲レ先乎。【四丁ウ】答如前說ニ言ニ至心信樂、即是真心相應之稱名也。汝亦許三心具足義。爾者、是念佛三昧也。若不與此心相應者、念佛三昧義不レ成。

若失此義唯守三持無量壽佛名之文字者、何故、疏第一卷釋云。此經觀佛三昧爲レ宗、亦念佛三昧爲レ宗（云云）。可レ相違此釋。何者、以下称名與ニ心念ニ相應スルヲ故。

《訓》

問ふ。若し尔らば、何が故ぞ、善導の釈に准ずるに、第十八願の中に称名を以て先とせんや。

答ふ。前に説くがごとし。「至心信樂」と言ふ。即ち是れ真心相應の称名なり。汝も亦た三心具足の義を許す。爾らば、是れ念仏三昧なり。

若し、此の心と相應せずんば、念仏三昧の義、成ぜざらん。

若し、此の義を失して、唯だ「持無量壽仏名」の文字を守らば、何が故ぞ『疏』の第一卷に釈して云はく。

此の経は觀佛三昧を宗と為は、亦た念仏三昧を宗とす（云云）。

此の釈に相違すべし。何とならば「称名」と「心念」と相應するを以ての故に。

註

(18) 『觀經疏』、『大正蔵』三七、二五〇頁中。

(19) 「前に説く」、『摧邪輪』卷上、『鎌旧』三三二六頁下。

(20) 「至心信樂」、『無量壽經』、『大正蔵』十二、二六八頁上。

(21) 『觀經疏』、『大正蔵』三七、二四七頁上。

《翻刻》

設雖レ非ニ修慧ニ可レ得ニ聞思相應念佛三昧。又設雖レ不レ發ニ聞惠、於ニ生得善心中ニ（准ニ俱舍等四惠相生義、今出生得ニ可レ知）生ニ甚深愛敬念。以ニ此念是三昧方便ニ故、於ニ因立果名ニ念佛三昧也。此義亦如ニ前成。

《訓》

たとひ「修慧」に非ずと雖も、聞思相應の念仏三昧を得べし。

又、たとひ「聞惠」を發せずと雖も、生得善心の中において、「俱舍」等の「四惠相生の義」に准じて、今、生得を出す。知るべし。

甚深の愛敬の念を生ず。此の念は是れ三昧の方便なるを以ての故に、因において果の名を立てて「念仏三昧」と名づくるなり。此の義も亦た前に成ずるがごとし。

註

(22) 『俱舍論』、『大正蔵』二九、一頁中・一一六頁中。

(23) 「前に成ずる」、『摧邪輪』卷中、『鎌旧』三三三頁上。

《翻刻》

或有於称名位隨分攝ニ散心ニ故假立定名。或師、於称名立斂心定名【四五丁才】是也。今述大綱。不レ可レ違ニ諸門也。是故付ニ属ニ称名、即是付ニ属念佛三昧也。付ニ属念佛三昧即是付ニ属觀佛三昧也。宗旨属累相成無レ違也。

《訓》

或は、「称名の位」において随分に散心を撰するが故に「定」の名を仮立すること有り。

或る師、称名において「斂心定」の名を立つる、是れなり。今は大綱を述ぶ。諸門に違すべからざるなり。

是の故に、「称名を付属する」は、即ち是れ「念仏三昧を付属する」なり。「念仏三昧を付属する」は、即ち是れ「観仏三昧を付属する」なり。宗旨属累、相成して違無きなり。

註

(24) 【参考】明恵述高信編『解脱門義聴集記』「方便定ヲ又斂心定ト云也」、『金沢文庫研究紀要』四、一五二頁。

《翻刻》

然菩提心者、志求佛果^{トハ}心^ニ故、於定散二善^{ナレカニ}皆通有^{シテ}之^リ。摠言^{シテ}之^レ、從^リ因向^レ果^ニ一切心慈悲願行等^{ナカ}皆無^ク不^レ與^{コト}菩提心^ニ相應^セ故、今念佛三昧觀佛三昧者、正觀^ク念^{スルカ}佛菩提果^ニ故、即是三昧菩提心也。

《訓》

然るに、菩提心とは仏果を志求する心なるが故に、定散二善において、皆な通じて之れ有り。惣じて之れを言へば、因依り果に向う一切の心、慈悲、願行等、皆な菩提心と相応せざること無きが故に。今の「念仏三昧の観仏三昧」とは、正しく「仏菩提の果を観念する」が故

に、即ち是れ「三昧の菩提心」なり。

《翻刻》

凡六度行皆以菩提心^ヲ爲^ス本^ト。其中諸三昧善、設雖^レ非^ニ念^ス【三五九頁下】佛三昧、其心順^ニ法無我理^ニ所^レ修^{スル}三昧^ヲ皆^{シテ}以^テ名^ク菩提行^ト。其所依^ル心^ニ名^ク菩提心^ト也。是故第三地菩薩修^{スル}四禪等^ヲ皆^{シテ}是^レ菩提行^也。其所依^ル心^ニ是^レ菩提心^也。

《訓》

凡そ、六度の行、皆な菩提心を以て本とす。其の中に諸ろの三昧善、たとひ念仏三昧に非ずと雖も、其の心、法無我の理に順じて修する所の三昧をば、皆な以て「菩提の行」と名づく。其所依の心をば、「菩提心」と名づくるなり。是の故に、第三地の菩薩、四禪等を修する。皆な是れ「菩提の行」なり。其所依の心は是れ菩提心なり。

《翻刻》

依^レ之^ニ【四五丁ウ】菩提行經^ニ云^フ菩提心靜慮波羅密等^ト蓮華戒菩薩廣釋菩提心論^ニ廣明^ク菩提心^義、亦引諸經^ヲ多^ク說^ク三昧善^ヲ。即此意也。又非^ニ唯^ニ限^ル三昧善^ニ、自餘諸行皆^{シテ}以^テ如^シ是^ト。是故羅什所譯^ノ二卷菩提心論^ニ明^ク菩提心^義、廣說^{ケリ}六度行^ヲ。又菩提行經^ニ名^ク菩提心忍辱波羅蜜菩提心精進波羅蜜等^ト。又菩提資糧論^ニ六度^ヲ名^ク菩提資糧^ト。彼論^ニ云^ク。菩提者、一切智智^ト故、資糧者、能滿^ク菩提^法故^ト（等云云）。

《訓》

之れに依りて、『菩提行経』には、

菩提心静慮波羅蜜⁽²⁵⁾

等と云ふ。蓮華戒菩薩の『広釈菩提心論』に広く菩提心の義を明かすに、亦た諸経を引き多く「三昧善」を説く。即ち此の意なり。

又、唯だ「三昧善」にのみ限るに非ず。自余の諸行、皆な以て是のごとし。

是の故に、羅什所訳の二巻の『菩提心論』⁽²⁷⁾に、菩提心の義を明かすに、広く六度の行を説けり。

又、『菩提行経』に

菩提心忍辱波羅蜜⁽²⁸⁾。菩提心精進波羅蜜⁽²⁹⁾。

等と名づく。

又、『菩提資糧論』に、六度を説きて

菩提の資糧⁽³⁰⁾

と名づく。彼の『論』に云はく。

菩提とは一切智の故に。資糧とは能く菩提を満する法なるが故に⁽³¹⁾（等云云）。

註

- (25) 『菩提行経』、『大正蔵』三三一、五五二頁中。
- (26) 『広釈菩提心論』、『大正蔵』三三二、五六三頁下〜五六四頁中。
- (27) 『発菩提心経論』、『大正蔵』三三二、五一一頁上〜五一五頁中。
- (28) 『菩提行経』、『大正蔵』三三一、五四七頁中。
- (29) 『菩提行経』、『大正蔵』三三一、五五〇頁下。

- (30) 『菩提資糧論』、『大正蔵』三三一、五二五頁下。
- (31) 『菩提資糧論』、『大正蔵』三三一、五一七頁中。

《翻刻》

彼所依心是菩提心也。又華嚴十行十許向十地品等意、皆是同レ之。此等文義、不_レ能_二具出_一。是故念佛善根、若散、若定、離_レ菩提心_一以_レ何爲所依_一乎。就_レ中善導和尚【四六丁オ】既引功德雲比丘念佛三昧文_一證_レ成萬行中一行義。然此比丘、善財知識中爲_二初發心住善友_一。

《訓》

彼の所依の心は是れ菩提心なり。又、『華嚴』の「十行」⁽³²⁾「十廻向」⁽³³⁾「十地品」⁽³⁴⁾等の意、皆な是れ、之れに同ず。此等の文義、具さに出すに能はず。是の故に、念仏の善根、若しは「散」、若しは「定」、菩提心を離れては、何を以てか所依とせんや。中に就くに、善導和尚、既に功德雲比丘の念仏三昧の文⁽³⁵⁾を引き、万行の中の一行の義を証成す⁽³⁶⁾。然るに、此の比丘、善財が知識の中には初發心住の善友たり⁽³⁷⁾。

註

- (32) 「十行」、六〇卷『華嚴経』「功德華聚菩薩十行品」、『大正蔵』九、四六六頁。
- (33) 「十廻向」、六〇卷『華嚴経』「金剛幢菩薩十廻向品」、『大正蔵』九、四八八頁。
- (34) 「十地」、六〇卷『華嚴経』「十地品」、『大正蔵』九、五四二頁。
- (35) 「功德雲比丘念仏三昧文」、六〇卷『華嚴経』、『大正蔵』九、六八九

頁下〜六九〇頁中・八〇卷『華嚴經』、『大正藏』十、三三四頁上。

(36) 『觀經疏』、『大正藏』三七、二四九頁下。

(37) 六〇卷『華嚴經』、『大正藏』九、六八九頁下〜六九〇頁中・八〇卷『華嚴經』、『大正藏』十、三三四頁上。

《翻刻》

發心者、即發菩提心也。此比丘以爲念佛三昧主故善財初對文殊入法界信位依文殊旨示次值此比丘。比丘說念佛三昧法、善財聞之種姓顯發即入發菩提心住。香象大師釋發心住名云。於大菩提起決定心入位不退故云初發心（等云云）。

《訓》

「發心」とは、即ち「發菩提心」なり。此の比丘、念仏三昧の主たるを以ての故に、善財、初めに文殊に対して「法界信位」に入りて、文殊の指示に依りて、次に此の比丘に値ふ。

比丘「念仏三昧の法」を説くに、善財、之れを聞きて「種姓顯發」して、即ち「發菩提心住」に入る。

香象大師「發心住の名」を釈して云はく。

大菩提において、決定心を起して入位不退なるが故に初發心と云ふ（等云云）。

註

(38) 六〇卷『華嚴經』、『大正藏』九、六九〇頁中。

(39) 法藏『探玄記』、『大正藏』三五、一九七頁中。

《翻刻》

又釋行本義云。謂發菩提心爲十住之本。但轉此心漸増勝故。成後諸住故也（已上）。當知。非唯成後九住、十行十向十地皆依此初住成也。是故其名義、通十地自體真無漏道尚有爲初義。【四六丁ウ】謂。此云發心住、彼云歡喜地者、此舉能發之心、彼出所發之歡喜。十地尚爾、況十行十廻【三六〇頁上】向乎。此義、具可見慧光法師華嚴義記。

《訓》

又「行本の義」を釈して云はく。

謂はく、發菩提心を十住の本とす。但だ此の心を転じて漸く増勝するが故に。後の諸住を成すが故なり（已上）。

当に知るべし。唯だ後の九住を成すのみに非ず。「十行」「十向」「十地」皆な此の「初住」に依りて成ずるなり。是の故に、其の名義、十地の自体真無漏道に通じて、尚し初義とすること有り。謂はく。此をば「發心住」と云ひ、彼をば「歡喜地」と云ふは、此は「能發の心」を挙げ、彼は「初發の歡喜」を出す。「十地」尚爾り。況や「十行」「十廻向」をや。此の義、具さには慧光法師の『華嚴の義記』を見るべし。

註

(40) 法藏『探玄記』、『大正藏』三五、一九七頁上。

(41) 失。

《翻刻》

經中説ニ入住行ニ云。諸佛子、何等是菩薩摩訶薩初發心住。此菩薩、見佛三十二相八十種好妙色具足、尊重難遇。或觀三神變。或聞説法。或聽教誡。或見衆生受無量苦。或聞如來廣説佛法。發菩提心求一切智一向不廻（文）。

探玄記第五有一釋云。初六句舉發心所依縁（私云從見佛三十二相至或聞如來廣説佛法是也）。次一句明所發心體（私云發菩提心一句也）。次一句明發心所求（私云求一切智一句也）。後一句明不退還（私云一向不廻一句也）。

《訓》

『經』の中に「入住の行」を説きて云はく。

諸仏子よ、何等が是れ菩薩摩訶薩の初發心住。此の菩薩、仏の三十二相八十種好妙色具足して、尊重にして、遇ひ難きを見る。或は神變を觀る。或は説法を聞く。或は教誡を聴く。或は衆生の無量の苦を受くるを見る。或は如來の廣く佛法を説くを聞く。菩提心を發して一切智を求めて一向に廻せず（文）。

『探玄記』の第五に、「一の釈」有りて、云はく。

初めの六句は「發心の所依縁」を挙ぐ（私に云はく、「見仏三十二相」従り「或聞如來廣説佛法」に至るまで、是れなり）。次の一句は「初發心の體」を明かす。（私に云はく、「發菩提心」の一句なり）。次の一句は「發心の所求」を明かす。（私に云はく、「求一切智」の一句なり）。後の一句は「退還せざること」を明かす（私に云はく、「一向不廻」の一句なり）。

註

- (42) 六〇卷『華嚴經』、『大正藏』九、四四五頁上。
- (43) 法藏『探玄記』、『大正藏』三五、一九八頁上。

《翻刻》

【四七丁才】曰。九句經文中、初六句、發心所依縁。第八所求一切智。第九明發心不退義。第七發菩提心一句、此住體也。説彼所依縁中、縁佛身相好等念尊重難遇德。即是念佛義也。以此爲因發菩提心。然汝云菩提心抑念佛。何其相翻乎。

《訓》

解して曰はく。九句の經文中に、初めの六句は「發心の所依縁」。第八は「所求の一切智」。第九は「發心不退の義」を明かす。第七の「發菩提心」の一句、此の「住」の體なり。彼の「所依縁」を説く中に、仏身の相好等を縁じ、尊重難遇の徳を念ず。即ち是れ「念佛の義」なり。此を以て「因」として菩提心を發す。然るに、汝「菩提心、念仏を抑う」と云ふ。何ぞ其れ、相翻せるや。

註

- (44) 『選擇本願念仏集』第十二章、『昭法全』三四三頁。

《翻刻》

若爾者、功德雲比丘、對善財、涌無尊智雲、振大雷音、耀甚深念佛三昧、大電光。爾時善財菩提心水、何不枯竭乎。若云念佛三昧爲初發心解脫門者、撥去菩提心之汝者、可爲念佛行人耶。如何。又功德雲比丘既爲發心住知識。十地論云。此三昧是法體。云云。此三昧者、大乘光明三昧也。十地法門【四七丁ウ】以此三昧爲躰也。

《訓》

若し爾らば、功德雲比丘、善財に対して無碍智の雲を涌し、大雷の音を振ひて、甚深念仏三昧の大電光を耀す。爾の時に、善財、菩提心の水、何ぞ枯渴せざるや。若し、「念仏三昧、初發心の解脫門たり」と云はば、菩提心を撥去する汝は念仏の行人とすべけんや。如何ぞ。

又、功德雲比丘、既に「發心住の知識」たり。『十地論』に云はく。此の三昧は是れ法体なり、と云云。

「此の三昧」とは「大乘光明三昧」なり。十地の法門、此の三昧を以て体とするなり。

註

- (45) 『十地經論』、『大正藏』二六、一二四頁中。
- (46) 『十地經論』、『大正藏』二六、一二四頁中。

《翻刻》

准此宗家釋云。十住法門以菩薩無量方便三昧爲體。十行法門以善伏三昧爲體。十廻向法門以明智三昧爲體。准知、寶藏如來

入三不失菩提心三昧、示佛刹。淨土行立、以此爲根本。明知。淨土諸行皆以三不失菩提心三昧爲體也。汝何号淨土宗行人、撥去【三六〇頁下】菩提心乎。

《訓》

此に准じて、宗家釈して云はく。

十住の法門は、菩薩無量方便三昧を以て体とす。

十行の法門は、善伏三昧を以て体とす。

十廻向の法門は、明智三昧を以て体とす。

准知するに、寶藏如來「不失菩提心三昧」に入りて仏刹を示す。

「淨土の行」立つること、此を以て根本とす。

明かに知ぬ。「淨土の諸行」は皆な「不失菩提心三昧」を以て、体とするなり。汝、何ぞ「淨土宗の行人」と号して、菩提心を撥去するや。

註

- (47) 法藏『探玄記』、『大正藏』三五、一九七頁下。
- (48) 法藏『探玄記』、『大正藏』三五、二一八頁中。
- (49) 法藏『探玄記』、『大正藏』三五、二四四頁上。
- (50) 『悲華經』、『大正藏』三、一八三頁中。

《翻刻》

又念佛三昧名字有離合二釋。先約離門有三法。一念一佛三三昧也。

初念者、即正念也。如前言觀察正念諸佛三昧。然正念者、正在菩提心也。如離相論云、菩提心者、大乘中最勝。我於此心安住正念。〈文〉。是故念言即菩提心也。

《訓》

又、「念仏三昧」の名字に「離」「合」二積有り。

先ず「離門」に約するに、三法有り。一は念。二は仏。三は三昧なり。

初めに、「念」とは即ち「正念」なり。前に「觀察正念諸佛三昧」と言ふがごとし。然るに「正念」とは、正しく菩提心に在るなり。

『離相論』に云ふがごとし。

菩提心とは大乘の中に最勝なり。我れ此の心において正念に安住す。〈文〉。

是の故に「念」の言は、即ち「菩提心」なり。

註

(51) 「前に」、『摧邪輪』卷上、『鎌旧』三二八頁上。

(52) 六〇卷『華嚴經』、『大正藏』九、六九〇頁上。

(53) 『菩提心離相論』、『大正藏』三二一、五四三頁中。

《翻刻》

如同論云【四八丁才】菩提心者、住等引心。〈文〉。此所等引者、非唯限定心也。諸行若順菩提、有寂靜義故云等引。如同論上文

云。所有諸佛三世事業、一切皆住菩提界中之所。攝藏。雖所攝藏彼一切法而常寂靜。〈文〉者、即此義也。即佛法諸行通定散二善。皆有此義。以此而言、外道所有三昧是雖爲定、不順菩提心。無寂靜義故、無此等引義。散善等尚有此義、況於定善乎。是故三昧之言亦是菩提心也。

《訓》

同『論』に云ふがごとし。

菩提心とは、等引に住する心なり。〈文〉。

此に言ふ所の「等引」とは、唯だ「定心」のみに限ら非るなり。

「諸行」若し菩提に順ずれば「寂靜の義」有るが故に「等引」と云ふ。同『論』の上の文に云ふがごとし。

所有の諸佛三世の事業、一切皆な菩提界の中に住して、之れ攝藏せられたり。彼の一切の法を攝藏する所と雖も、而も常に寂靜なり。と。〈文〉。

とは、即ち此の義なり。即ち仏法の諸行は、定散二善に通じて皆な此の義有り。

此を以て言へば、外道の所有の三昧は、是れ「定」とすと雖も菩提心に順ぜず。「寂靜の義」無きが故に、此の「等引」の義無し。「散善」等、尚し此の義有り。況や「定善」においてをや。是の故に「三昧」の言も亦た是れ菩提心なり。

註

(54) 『菩提心離相論』、『大正藏』三二一、五四三頁中。

(55) 『菩提心離相論』、『大正蔵』三三二、五四二頁中。

(56) 『大莊嚴論經』、『大正蔵』四、三三六頁下。
(57) 『大莊嚴論經』、『大正蔵』四、三二七頁上。

《翻刻》

次中間佛之言者、具云佛陀。此音有八轉聲差別。第四轉聲云菩提。是故具云阿弥陀佛隨、或云阿弥陀菩提。馬鳴莊嚴論中呼迦葉佛。或云【四八丁ウ】迦葉三藐三佛隨、或云迦葉三藐三菩提。即是也。常途言佛者、以陀音攝佛字入聲云佛。此呼梵語例法也。是故云念佛三昧者、即是言念菩提三昧也。言觀佛三昧者、即是言觀菩提三昧也。然者、念佛三昧名言、未有一字、非菩提心也。

《訓》

次に、中間の「仏」の言は、具さには「仏陀」と云ふ。此の音に「八転声」の差別有り。第四転声を「菩提」と云ふ。是の故に、具さには「阿弥陀仏陀」と云ひ、或は「阿弥陀菩提」と云ふ。馬鳴『莊嚴論』の中に、迦葉仏を呼びて、或は「迦葉三藐三仏陀」と云ひ、或は「迦葉三藐三菩提」と云ふ。即ち是れなり。

常途に「仏」と言ふは、「陀」の音を以て「仏」の字の入声に撰して「仏」と云ふ。此は梵語を呼ぶ例法なり。是の故に「念仏三昧」と云はば、即ち是れ「念菩提三昧」と言ふなり。「觀仏三昧」と言はば、即ち是れ「觀菩提三昧」と言ふなり。然らば、「念仏三昧」の名言、未だ一字として菩提心に非ざるは有らざるなり。

註

《翻刻》
次約合門者、其名義即是爲一菩提心也。何者、梵語上下連續呼之。順漢土風俗翻文字置之。若順梵文者、可有云佛念。然佛者菩提也。念義在心也。即菩提者一切智智、心者念一切智智心也、三昧者是定也。雖然念佛三昧者、是約人也。如彼云不失菩提心三【三六一頁上】昧者、是約法也、如大日經【四九丁オ】疏云。約菩提義、即有無量無邊金剛印。約佛陀義、即有無量無邊持金剛者〈文〉。

《訓》

次に「合門」に約せば、其の名義、即ち是れ一つの菩提心とするなり。何とならば、梵語は上下連続して之れを呼ぶ。漢土風俗に順じて文字を翻じて之れを置けり。
若し梵文に順ぜば「仏念」と云ふこと有るべき。然るに「仏」とは「菩提」なり。
「念」の義は心に在るなり。即ち「菩提とは一切智智」「心とは一切智智を念ずる心」なり。
「三昧」とは是れ「定」なり。然りと雖も「念仏三昧」は是れ「人」に約するなり。彼の「不失菩提心三昧」と云ふがときは、是れ

「法」に約するなり。『大日經の疏』に云ふがごとし。

菩提の義に約すれば、即ち無量無辺の金剛印有り。

仏陀の義に約すれば、即ち無量無辺の持金剛者有り⁽⁵⁸⁾。〈文〉。

註

(58) 『大日經疏』、『大正藏』三九、五八〇頁中。

《翻刻》

如^ク次^ノ上^ノ法^ハ、下^ノ人^{ナリ}。可^シ知^ヌ。通^{スル}説^ニ。雖^レ爲^ニ一^ノ義^ト、別^{スル}説^ニ。有^ニ人^ノ法^ノ差^ノ別^一。今^ハ爲^シ顯^カ念^フ佛^ト三^ノ昧^ト以^テ菩^テ提^ク心^ヲ爲^ス體^ト故^ニ、約^{シテ}通^{スル}相^ノ門^ニ釋^ス名^ノ字^ト也^一。例^{セバ}如^ク下^ノ彼^ノ三^ノ身^ノ四^ノ智^ノ分^ニ差^ノ別^一者^ハ別^{スル}説^ノ門^ニ、四^ノ智^ノ攝^ス三^ノ身^ト者^ハ是^レ通^{スル}相^ノ門^ニ也^一。是^レ又^ハ人^ノ法^ノ同^ノ異^ト也^一。是^レ故^ニ念^フ佛^ト三^ノ昧^ト者^ハ、名^ノ字^ノ體^ノ用^ノ都^テ不^レ離^ス菩^テ提^ク心^ト也^一。然^レ汝^ハ執^{シテ}念^フ佛^ト三^ノ昧^ト而^モ撥^ス菩^テ提^ク心^ト者^ハ、宛^モ麤^ク食^セ念^フ佛^ト名^ノ字^ト也^一。按^ズ苾^芻往^シ生^ス宗^ノ義^ト也^一。可^シ咲^ク可^シ咲^ク。

《訓》

次のごとく、上は「法」、下は「人」なり。知ぬべし。通説するに一義とすと雖も、別説するに「人」「法」の差別有り。今は、念仏三昧、菩提心を以て体とすることを顕さんが為の故に「通相門」に約して名字を釈するなり。例せば、彼の三身、四智に差別を分かつは「別説門」。四智に三身を撰するは是れ「通相門」なるがごとし。是れ又、「人」「法」の「同」「異」なり。

是の故に「念仏三昧」とは、「名字」「体」「用」都て菩提心を離れ

ざるなり。然るに汝、「念仏三昧」を執して、而も菩提心を撥するは、宛も念仏の名字を飽食せるなり。往生の宗義を按瓜せるなり。咲ふべし。咲ふべし。

《翻刻》

問曰。如^キ我^ノ所^ヲ知^ル者^ハ、言^フ觀^ス佛^ト三^ノ昧^ト者^ハ、觀^ス佛^ト色^ノ身^等也^一。即^チ如^キ觀^ス經^ノ第^九觀^ノ等^一也^一。言^フ念^フ佛^ト三^ノ昧^ト者^ハ、唯^ニ是^レ稱^ス念^ス名^ノ号^ト也^一。既^ニ有^ニ此^ノ不^ノ同^一。若^シ【四九丁ウ】爾^ラ者^ハ、何^ノ云^フ下^ノ付^ニ屬^ス念^フ佛^ト、即^チ爲^シ付^ニ屬^ス觀^ス佛^ト三^ノ昧^ト乎^一。若^シ亦^ハ一^ノ體^ト者^ハ、何^ノ故^ニ疏^ニ重^ク言^フ出^ス觀^ス佛^ト三^ノ昧^ト外^ニ亦^ハ云^フ念^フ佛^ト三^ノ昧^ト爲^シ宗^ノ乎^一。如^ク何^ノ。

《訓》

問ひて曰はく。我が知る所のごときは、「觀仏三昧」と言ふは仏の色身等を觀ず。即ち『觀經』の「第九觀」等のごときなり。「念仏三昧」と言はば、唯だ是れ名号を稱念するなり。既に此の不同有り。若し爾らば、何ぞ「念仏を付屬するを即ち觀仏三昧を付屬すとす」と云ふや。若し亦た一体ならば、何が故ぞ『疏』に重言して「觀仏三昧」を出す外に、亦た「念仏三昧」を云ふを「宗とす」と云ふや。如何ぞ。

註

(59) 『摧邪輪』卷中、『鎌旧』三五九頁上。

(60) 『觀經疏』、『大正藏』三七、二四七頁上。

《翻刻》

答。其大綱、雖前成、汝被_レ封_レ妄見、本執尚難_レ改。仍被_レ纏_レ此疑網。今引_レ經疏文、重可_レ成_レ彼義。謂。觀經說_レ第八像觀、終云。作_レ是觀者、除_レ無量億劫生死之罪、於_レ現身中、得_レ念佛三昧。疏第二釋云。從_レ作是觀者、下至_レ得念佛三昧、已_レ來、正明_レ尅念修觀、現蒙_レ利益。《云云》。解曰。尅念修觀者、是觀佛義、現蒙利益者、指_レ經得念佛三昧文也。下結句念言即指_レ觀義、言_レ念佛也。《云云云云》。

《訓》

答ふ。其の大綱、前に成すと雖も、汝、妄見に封せられて、本執、尚し改め難し。仍て此の疑網に纏わられたり。

今、『經』『疏』の文を引きて、重ねて彼の義を成すべし。謂はく、『觀經』に「第八の像觀」を説く終りに云はく。

此の觀を作す者は、無量億劫の生死の罪を除きて、現身の中において念仏三昧を得、と。

『疏』の第三に積して云はく。

「作是觀者」從り下、「得念仏三昧」に至るまでより以來たは、正しく尅念修觀して、現に利益を蒙ることを明かす、と《云云》。

『經』の「得念仏三昧」の文を指すなり。下の結句の「念」の言は、即ち「觀義」を指して「念仏」と言ふなり《云云。是れ一》。

註

(61) 『摧邪輪』卷中、『鎌田』三五八頁上。

(62) 『觀無量壽仏經』、『大正藏』十二、三四三頁中。
(63) 『觀經疏』、『大正藏』三七、二六七頁下。

《翻刻》

又說_レ第九眞身觀、經文云。但當憶想_レ令_レ下心眼見_レ。見_レ此事【五〇丁】者、即見_レ十方一切諸佛。以_レ見_レ諸佛、故名_レ念佛三昧。作_レ是觀者、名_レ觀一切佛身。《等云云》。疏云。一明_レ因_レ觀得_レ見_レ十方諸佛。二明_レ【三六一頁下】以_レ見_レ諸佛、故結_レ成_レ念佛三昧。三明_レ但觀_レ一佛、即觀_レ一切佛身也。《云云》。解曰。經文言_レ令_レ下心眼見_レ乃至作_レ是觀者等、者、是觀佛也。言_レ名念佛三昧者、即_レ是念佛也。疏中言_レ因觀得見乃至但觀_レ一佛等、者是觀佛也。言_レ以見諸佛故結成念佛三昧者、即_レ是念佛三昧也。《是二》。

《訓》

又、「第九の眞身觀」を説く經文に云はく。

但だ、當に憶想して心眼をして見せしむ。此の事を見る者は、即ち十方一切の諸仏を見る。諸仏を見るを以ての故に「念仏三昧」と名づく。是の觀を作す者を「觀一切仏身」と名づく《等云云》。

『疏』に云はく。

- 一は、觀に因て十方の諸仏を見ることを得ることを明かす。
- 二は、諸仏を見るを以ての故に、念仏三昧を結成することを明かす。

三は、但だ一仏を觀るに、即ち一切の仏身を觀ることを明かすな

り、と〈云云〉。⁽⁶⁵⁾

解して曰はく。經文に「令心眼見」乃至「作是觀者」等と言ふは、是れ「觀仏」なり。「名念仏三昧」と言ふは、即ち是れ「念仏」なり。『疏』の中に「因觀得見」乃至「但觀一仏」等と言ふは、是れ「觀仏」なり。「以見諸仏故結成念仏三昧」と言ふは、即ち是れ「念仏三昧」なり〈是れ二〉。

註

- (64) 『觀無量壽仏經』、『大正藏』十二、三四三頁中下。
- (65) 『觀經疏』、『大正藏』三七、二六八頁上。

《翻刻》

又當卷疏中釋念佛衆生攝取不捨經文、出三義中釋第二近縁疏文云。衆生願見佛、佛即應念現在目前。解曰。即衆生願見佛者、是念佛也。言現在【五〇丁ウ】目前等者、是觀佛也〈是二〉。

《訓》

又、當卷の『疏』の中に、「念仏衆生攝取不捨」の經文を釈するに、三義を出す中に第二の「近縁」を釈する『疏』の文に云はく。

衆生、仏を見んと願すれば、仏即ち念に應じて現に目の前に在り。解して曰はく。即ち「衆生願見仏」とは是れ「念仏」なり。「現在目前」等と言はば是れ「觀仏」なり〈是れ二〉。

註

- (66) 『觀無量壽仏經』、『大正藏』十二、三四三頁中。
- (67) 『觀經疏』、『大正藏』三七、二六八頁上。

(よねざわ みえこ 嘱託研究員)